

インフルエンザ流行予報 第3報

— 2026 年 9 月、A(H1N1)pdm09 による早期流行が始まりました —

医療関係者向け 2026 年 9 月 13 日発行（流行状況は 2026 年 9 月 12 日現在）

要 旨

- 2026 年 9 月、例年の冬季シーズンを待たずに、香港・台湾・タイで A(H1N1)pdm09 が優勢となり、国内でも沖縄県が 9 月 11 日にインフルエンザ注意報を発令しました。
- 第 2 報でお伝えしたとおり、今シーズンの主流は A(H1N1)pdm09（subclade D.3.1 / D.3.1.1）と考えられます。白金定点で 2026 年 7～8 月に分離された株もすべて D.3.1.1 に属していました。
- 2024/25 シーズンのワクチン株・流行株とは抗原性が離れており、2 年前に罹患した人も再感染し得ます。2026/27 シーズンワクチン株（A/Switzerland/6849/2025、D.3.1 系統）は現在の流行株を良好に認識すると報告されています。
- 今後、A(H1N1)pdm09 主流の流行が続くと予想されます。途中で A(H3N2) の流行が挟まるか、H1N1 のみで終息するか、B 型が出現するかは経過観察が必要です。
- ワクチン接種が一段落するまでの間、手洗い・咳エチケット・換気・体調不良時に休むといった感染対策の基本を国民が心がけることが重要です。医療機関では早期の検査・診断、重症例（ウイルス性肺炎・脳症）への注意、ワクチン接種の早期開始をお願いします。

1. 2026 年 9 月上旬の流行状況

2026 年 9 月、東アジア各地でインフルエンザの流行が活発になっています。特に香港と台湾では A(H1N1)pdm09 が流行の中心であり、日本でも沖縄県で患者数が増加し、9 月 11 日にインフルエンザ注意報が発令されました。

地域	最新の状況（2026 年 9 月上旬）
香港	第 36 週（8/30～9/5）A 型陽性 1,150 検体。亜型判定された 1,106 検体中、H1 が 942 検体（約 85%）。7 月頃は H3N2 が多かったが、8 月に入り H1N1 が急増（第 32 週 576/965 → 第 35 週 760/935 → 第 36 週 942/1,106）。
台湾	第 35 週に流行閾値を超え流行期入り。9 月 8 日の疾病管制署発表で A 型のうち H1N1 が

地域	最新の状況（2026 年 9 月上旬）
	79.4%。9 月 1～7 日の新規重症例 105 例中 97 例が H1N1。
タイ	7 月以降、A 型 H1N1 が多数検出。
沖縄県	第 36 週（8/31～9/6）報告数 455 人、定点当たり 10.34 人（注意報基準 10 人）。南部保健所管内 13.17 人、八重山保健所管内 13.33 人。流行ウイルスが H1N1 主体かは公表データからは未確認。

日本と人の往来が非常に多い地域で、ほぼ同時期に A(H1N1)pdm09 が優勢になっている点が重要です。沖縄県で 8 月末～9 月初めという非常に早い時期に注意報レベルに達したことも、今後の全国的な動向を考える上で注目されます。

2. 早期流行の要因 — 複数の条件が重なった

今回の早い流行は、単一の原因ではなく、東アジアでの A(H1N1)pdm09 流行、夏休みの大規模な人の移動、ウイルスの遺伝的・抗原的变化、気象条件、そして学校再開が重なった結果と考えるのが妥当です（図 1）。



※複数の要因が重なって流行が成立すると考えられます（模式図）。

図 1 今回考えられる流行成立の流れ（模式図） [新潟大学 齋藤玲子教授 作成]

（1）夏休みの人の移動 — 香港・台湾・沖縄との往来が過去最高

日本政府観光局（JNTO）によると、2026 年 7 月の訪日外客数は 344 万 2,100 人で 7 月として過去最高でした。台湾から 76 万 3,800 人（前年同月比 26.4%増、単月として過去最高）、香港から 27 万

2,500 人（同 54.8%増）が訪日しています。JNTO は台湾・香港について「スクールホリデー」や航空座席数の増加を要因に挙げています。

沖縄県の 2026 年 7 月入域観光客数は 96 万 3,900 人で 7 月として過去最高（国内客 69 万 3,800 人、外国客 27 万 100 人、外国客は前年同月比 11.0%増）でした。これだけで感染経路を証明することはできませんが、流行地のウイルスが別の地域へ持ち込まれる機会が大きく増えていたことは確かです。

(2) 夏～初秋でも流行は成立し得る

熱帯・亜熱帯地域では雨期にインフルエンザが増加する地域があり、世界 78 地点の解析では、温帯の「cold-dry（低温・乾燥）」型に加えて「humid-rainy（高湿度・多雨）」型の流行パターンが存在することが示されています。気象庁によれば日本の年平均気温は 100 年当たり 1.44℃の割合で上昇し、1 時間降水量 50mm 以上の大雨の頻度は約 1.5 倍（1976～85 年 vs 2015～24 年）となっています。「冬でなければ流行しない」という前提だけでは説明しにくくなりつつあります。ただし、今回の早期流行を温暖化だけで説明することはできず、気象条件は複数の要因の一つと位置づけるべきです。

(3) 学校再開による接触の増加

2009 年の A(H1N1)pdm09 流行時の英国の研究では、学童の接触人数は休暇中に学期中より約 40% 減少し、再生産数も約 35%低下したと推定され、学校再開後に流行が再拡大しました。夏休みに広い地域へ運ばれたウイルスが、9 月の学校再開後に子ども同士の接触を介して家庭・地域で増幅される、という流れは疫学的に十分考えられます。

3. 流行株の遺伝子変化と抗原性 — 2 年前とは別物

A(H1N1)pdm09 の HA 遺伝子は 5a.2a.1 クレードからさらに分化し、現在は D.3.1 および D.3.1.1 が世界的に優勢で、特に D.3.1.1 は東アジア（日本や中国を含む）や東南アジアで優勢です。WHO のヒト血清解析では、2024/25 シーズンのワクチン株 A/Wisconsin/67/2022 類似株接種後の抗体価は、最近の D.3.1 / D.3.1.1 ウイルスの一部に対して有意に低下していました。これを受けて WHO は 2026/27 シーズンの H1N1 ワクチン株を A/Missouri/11/2025 類似株に変更し、国内決定株は同系統の A/Switzerland/6849/2025 (IVR-278) です（図 2）。

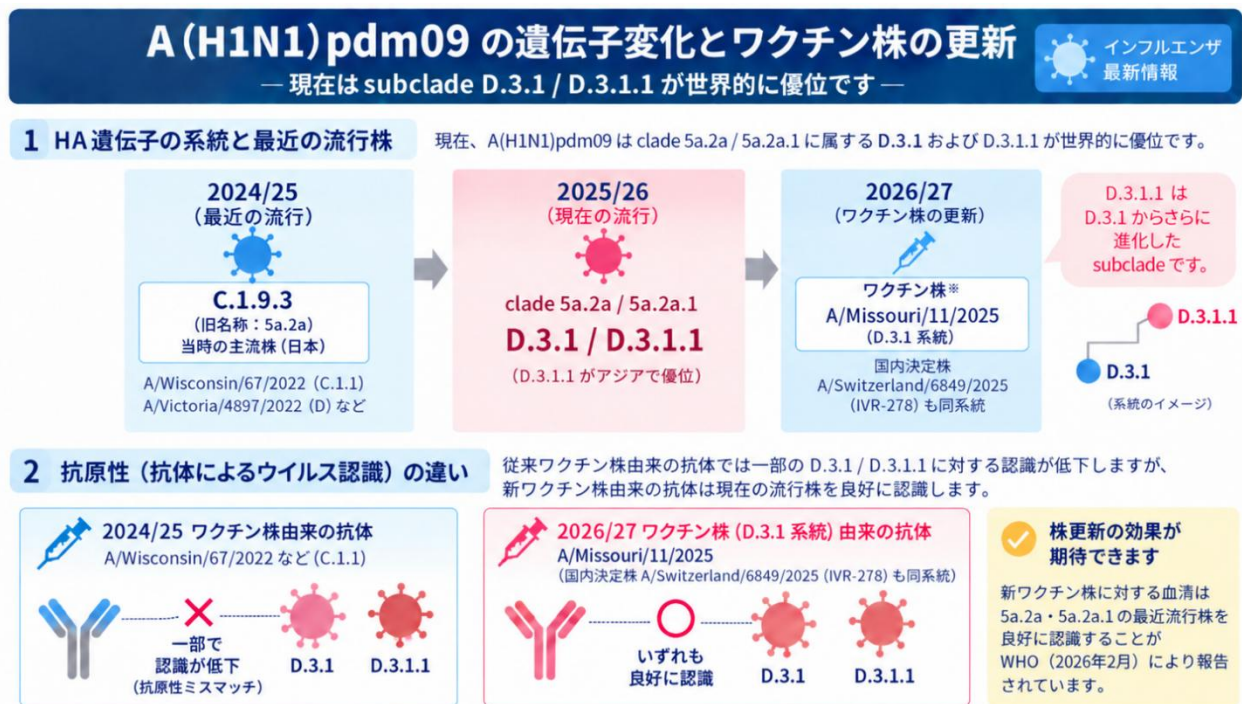


図2 A(H1N1)pdm09 の遺伝子変化とワクチン株の更新 [新潟大学 齋藤玲子先生 作成]

2023/24 シーズンに大流行した株 (C.1.9.3) は現在の流行株とは別系統です。2024/25 シーズンに感染した人が現在のウイルスに全く免疫を持たないわけではありませんが、時間経過による免疫の低下に加えてウイルス側の HA 抗原も変化しているため、「2 年前に H1N1 にかかったから今回は大丈夫」とは言えません。再感染は十分に起こり得ます。

白金定点における 2026 年 7~8 月分離株の HA 系統樹解析

白金定点 (東京都港区) で 2026 年 7~8 月に分離された A(H1N1)pdm09 株の HA 遺伝子系統樹を図 3 に示します。分離株はいずれも **subclade D.3.1.1** に属し、香港・シドニー・バンコク・マレーシアなどで同時期に分離された株と同じ枝に位置していました。8 月分離株の一群は N287S (糖鎖脱落) を共有し、A135S や G155E の置換をもつ株も認められました。2026/27 シーズン国内ワクチン株 A/Switzerland/6849/2025 は、これらの流行株と同じ D.3.1 系統に位置しています。

AH1pdm09 HA NJ 系統樹 2026.9.11

赤字 : 各シーズンワクチン株
緑字 : 2024/25 シーズン分
離株
青字 : 2025/26 シーズン分
離株
ピンク字 : 白金定点関連
2026 年 7 月、8 月分
離株

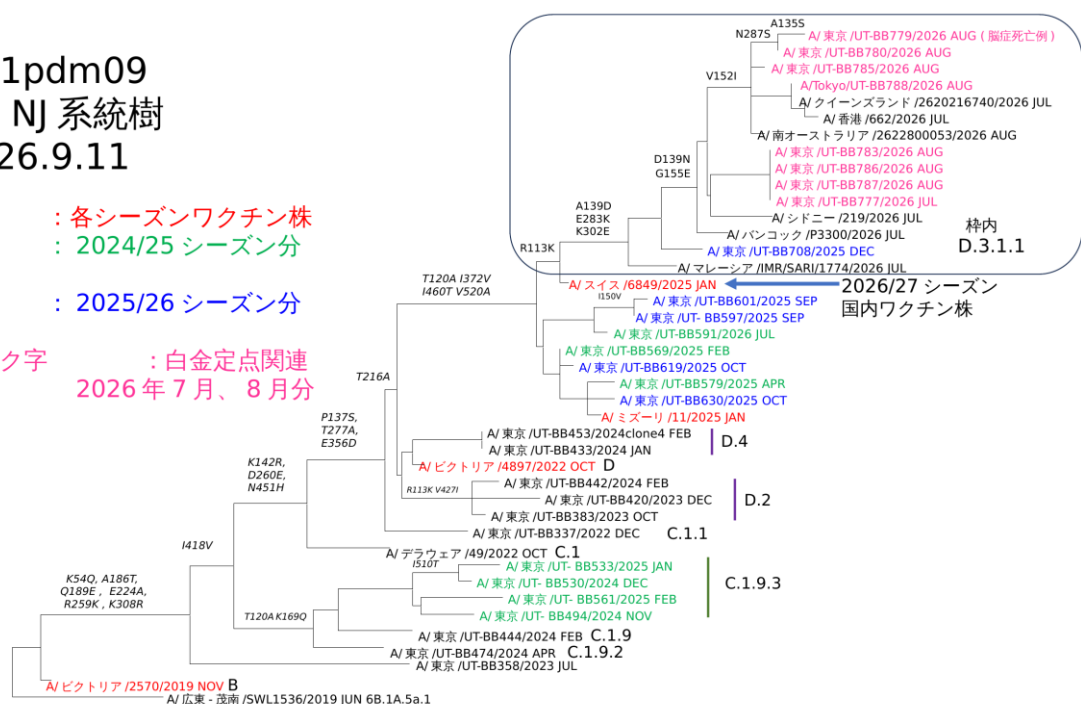


図 3 A(H1N1)pdm09 HA 遺伝子 NJ 系統樹 (2026 年 9 月 11 日作成) ピンク字 : 白金定点関連 2026 年 7・8 月分離株 [川上千春先生 (東京大学医科学研究所河岡研究室) 提供]

図 3 の解釈にあたっての留意点

- ・ 系統樹はあくまで白金エリア (東京都港区の一定点) の検体に基づくものであり、全国 の状況を直接示すものではありません。昨年の結果では白金エリアの検体情報は全国 の状況と比較的近似していましたが、全国的に集まった検体の解析結果を待つ必要があります。
- ・ 図中の脳症死亡例のみ東京都下の症例です。
- ・ 本解析からは、個々の変異と重症度との関連についてコメントすることはできません。

4. 今後の見通し

- ・ 当面は A(H1N1)pdm09 (D.3.1.1 主体) が主流のまま、流行が継続すると予想されます。
- ・ 途中で A(H3N2) の流行が挟まるのか、H1N1 のみで流行が終息するのか、また B 型 (B/Victoria) がいつ出現するのかは、現時点では判断できず、今後の経過を見る必要があります。
- ・ A(H1N1)pdm09 はウイルス性肺炎を起こしやすいことが知られており、脳症例も報告されています。小児・妊婦・基礎疾患のある方・高齢者では重症化に注意が必要です。
- ・ 2024/25 シーズンに A(H1N1)pdm09 に罹患した人でも再感染し得ることを、患者説明の前提にしてください。

5. 医療機関への提言

1. **検査・診断**：9月であっても発熱・呼吸器症状の患者ではインフルエンザを鑑別に入れ、早期に抗原検査またはPCRを実施してください。夏季の「インフルエンザではないだろう」という先入観が診断の遅れにつながります。
2. **治療**：ハイリスク患者・重症例では早期に抗インフルエンザ薬を投与し、呼吸状態の悪化（ウイルス性肺炎）や意識障害・けいれん（脳症）の徴候を見逃さないようにしてください。
3. **ワクチン**：2026/27 シーズンワクチン（H1N1 成分 A/Switzerland/6849/2025、D.3.1 系統）は現在の流行株を良好に認識することがWHO（2026年2月）により報告されています。供給開始後は可能な限り早期の接種を勧奨し、特に小児・高齢者・基礎疾患のある方・妊婦・医療従事者への接種を優先してください。
4. **感染対策の基本**：ワクチン接種が一段落するまでの期間は、手洗い、咳エチケット、換気、体調不良時に登校・出勤しないこと、など基本的な対策を国民が心がけることが重要です。外来・院内掲示や保護者説明を通じてご協力をお願いします。
5. **施設内対応**：保育所・学校・高齢者施設では、早期の患者把握と出席停止・登園基準の周知、集団発生時の速やかな報告をお願いします。
6. **サーベイランスへの協力**：全国の感染症定点の医療機関においてはH3N2やB型の出現を早期に捉えるため、亜型・型別の情報、分離株の提供にご協力ください。

参考資料

- ・ 香港特別行政区政府 衛生署衛生防護中心「Flu Express」第36週（2026年）
- ・ 台湾 衛生福利部疾病管制署 プレスリリース（2026年9月8日）
- ・ 沖縄県 感染症情報センター 感染症発生動向調査 第36週（2026年）／インフルエンザ注意報（2026年9月11日）
- ・ 日本政府観光局（JNTO）訪日外客数 2026年7月推計値／沖縄県 入域観光客統計 2026年7月
- ・ WHO. Recommended composition of influenza virus vaccines for use in the 2026–2027 northern hemisphere influenza season（2026年2月）
- ・ Tamerius JD, et al. Environmental predictors of seasonal influenza epidemics across temperate and tropical climates. PLoS Pathog 2013.
- ・ Eames KTD, et al. Measured dynamic social contact patterns explain the spread of H1N1v influenza. PLoS Comput Biol 2012.

- ・ 気象庁「気候変動監視レポート」／「日本の年平均気温」「大雨の発生頻度の長期変化」
- ・ 日本感染症予報協会「インフルエンザ流行予報 第 1 報（2026 年 8 月 5 日）」「第 2 報（2026 年 8 月 19 日）」
- ・ Nexstrain. Real-time tracking of influenza A/H1N1pdm evolution.

図 1・図 2：新潟大学大学院医歯学総合研究科 国際保健学分野 齋藤玲子教授 作成。図 3：東大医科学研究所川上千春先生 提供（HA NJ 系統樹、2026 年 9 月 11 日）。

本予報は 2026 年 9 月 12 日時点の公表情報および白金定点の解析に基づくものです。流行状況は毎週更新されるため、最新情報をご確認ください。次報は流行状況の変化（H3N2・B 型の動向、全国の亜型構成など）に応じて発行します。

監修 新潟大学大学院医歯学総合研究科 国際保健学分野 齋藤玲子教授

日本感染症予報協会 インフルエンザ流行予報 第 3 報（医療関係者向け）